私たちの「神」と日本人の「神」

２０１２年３月

「私たち」と私が言う場合、「私たち日本人」という意識と、「私たちクリスチャン」という思いの両方があります。すると当然、「私たち日本人クリスチャン」という自覚が頭をもたげます。

私たちクリスチャンが自分の神について語るとき、それは、天地を創造なさった神、全知全能で時空を超え、次元を超越して存在される絶対者と言う意味です。ただ、この神のことを、堕落した人類が始めから知っていたのではありません。確かに最初は、神に似せて造られ、神と交わり、本能的にそして体験的に良く知っていたのですが、罪のために神のみ許を追放され、悪魔の支配に降って腐敗し、そこで社会を築き上げた人間は、次第に神のことを忘れ、神の姿を見失ってしまいました。

とはいえ、神に似せて造られた人間は、他の動物とは異なります。神のような、霊的な性質を持っているのです。たとえ罪のために神から追放され、悪魔の支配の下に生きるようになっても、人間のこの霊的本性は失われず、神を感知し、神との交わりを求める本能もなくなってはいないのです。そのために人間は、時間と空間と物質に制限される三次元の世界に生きていながら、いつも目に見えない霊的次元に対する感覚を持ち続けています。

幽霊を恐れ、怨霊や死霊を怖がり、守護霊や背後霊にまつわる話が後を絶たないのも、人間に霊的本能があり、霊的感覚が完全に失われてはいないからです。この霊的感覚あるいは霊的本性の中でもっとも重要なのは、神を意識しながら生きることです。ただこの霊的感覚は、罪の結果大いに損なわれ、さらに悪魔の支配の下でずいぶん歪められ、怪談やホラー映画のネタになるような、ばかばかしい空想に満ちるようになっています。

どれほど神の存在を否定し、宗教を否定しても、人間には霊的感覚が備わっているために、神を感じ、霊の世界を思う本能があるのです。そのため、人間の存在したところには必ず宗教があり、何らかの礼拝が行われていました。人間以外の動物は、たとえ高度な霊長類といわれる動物たちにも宗教はありません。神に似せて造られておらず、霊的感覚が備わっていないためです。

そこで人間は、生まれたての赤ちゃんが本能によって乳房を求めるのと同じように、神

のない生活に心の空腹を感じ、神を礼拝したいと切望します。お腹がすいて我慢できない赤ちゃんが指にまで吸い付こうとするように、本当の神を見失った人間は、思い思いの宗教を作り上げてきました。当然、神概念は間違いだらけになり、とんでもない宗教が生み出され、おどろおどろとした世界が出来上がって、滅茶苦茶なことが行われるようになってしまいました。

そのような廃頽の中にある人間を見捨てずに、なんとか罪とその結果から救い出そうと、天地創造の神はご自分を現わしてくださったのです。ところが、神がご自身を現し、ご自分がどのような方であるかを教えるためには、大きな問題がありました。人間の言葉の限界のために、無限の神ご自身を正確に紹介するすべがなかったのです。創造主である神から追放され、創造主である神を忘れてしまった人間の言葉に、創造主である神を明確に言い表すべき単語はありませんでした。人間の表現に、絶対の神の姿を誤りなく説明できるものはなく、人間の知性に無限の神の本性を理解できる能力もなかったのです。神はご自分を誰だと言えばよかったのでしょう。ご自分は何であると語り、ご自分をどう説明すれば、人間に理解させることが出来たでしょうか。

神がご自分について語るとき、当然、当時の人々が使っていた言葉で、当時の人々の理解できる表現を用いなければなりませんでした。現代人の言葉と現代人の表現を用いたのでは、当時の人は誰も理解できなかったからです。当時の人々の神意識は、一般に多神教と呼ばれるものでした。神と呼ばれるものがたくさんあり、神を示す言葉もいくつもありました。ところがそれらの言葉の中には、すべてのものを超絶した天地創造の神の概念を持つ「神」という言葉はなく、神が「私は神である」とおっしゃっても、何の意味もなく、かえって誤って理解されたに違いありません。したがって、神はご自分を紹介するとき、とても苦心なさったのです。当時の人間に理解できるレベルまで落として、卑近な例を用いて語らなければ、理解されなかったのです。

聖書は、始めから「神」という単語を使って書き出しています。ただ、この単語自体、当時の周辺の宗教が用いていたものを借用したのであって、天地創造の神を正しく表現できる言葉ではありません。それでも、誰も天地創造の神を知らなかったのですから、とりあえず、周辺の宗教が用いていた言葉を使う以外に、方法がなかったのです。多分、たくさんあった神と言う言葉の中から、もっとも天地創造の神、全知全能の神に近い意味を含む言葉、あるいは出来るだけ腐敗した宗教行事や道徳と関わりのない、「神」と言う言葉が選ばれたのかもしれません。それが、「エローヒム」だったわけです。

ただし、事実はもっと複雑です。神はご自分がかなり誤って理解されることをさえ、寛容と忍耐でお許しになっていました。イスラエルの先祖アブラハムを選び出し、彼に現れ

てくださったときも、アブラハムはまだ、多くの神々の中の一人の神と言う感覚で理解したはずです。ただ、彼はその神をより優れた神であると認め、あるいは自分を選んでくださった神と認め、自分が仕える神と定めたのです。それから、神はアブラハムの神と呼ばれることを良として、さらにアブラハム、イサク、ヤコブの神と呼ばれることをお許しになりました。これで、多くの神々の中のどの神なのか、一応、判別できるようになりましたが、まだ確定した呼び名がなく、神の性質そのものを表現することもできませんでしたが、神は、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神で」と呼ばれることで、我慢をしてくださったのです。

　ところが、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」だけでは、やはり断然不充分でした。不確かな神概念のままでは、人間は正しい礼拝をすることが出来ません。神と人間の正しい関係を作ることも不可能です。そこで神は、決定的な自己紹介をしようとなさいました。それが、あの荒野の燃える柴の出来事です。（出エジプト３：1～15）

「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と呼ばれた神、モーセの先祖の神は、ヘブライ人の神は、改めて「私は存在そのものである」という、厳かな自己紹介をしてくださいました。この「私は・・・・・である」という神の自己紹介も、とても深い意味を持ち、どのように翻訳すべきものか、迷いに迷うところです。多分、ハムレットの"to be or not to be that is the question”　と同じくらい、名訳、迷訳があります。ちなみに、ハムレットのほうは、「やったろか～、あかんか～、ほな～、どないしょ～」という、ネットで見つけた大阪弁の訳が、まさに、拍手をしたいほどの訳だと思いますが・・・・・・。

「私は私である」、「私は存在する」、「私はある」、「私は存在するというものである」、「私はあるという者である」、「我はありてある者」、「我は自在なり」と、日本語でもいろいろです。ただ、はっきりしているのは、この神はあらゆる神々と異なる、あらゆる存在の本質にかかわる神であるということです。「ある」、「存在する」としか表現できない神です。ここにきて、神は、やっとご自分の本当の姿、本当の性質を表現する名前を教えてくださったのです。

　ただこの呼び名はあまりにも高度で、それこそ形而上学的で、現代人にさえとても理解が及ぶものではありません。多分、この神の自己紹介を直接聞いたモーセにも、その深い意味を理解することは出来なかったと思われます。ましてや当時の一般の人々には何のことやら見当もつかず、なじみにくかったと思われます。それだけに、他の神々との違いも明瞭にすることが出来ませんでした。

　そこで、この燃える柴の出来事の後、神が改めて多くの奇跡や不思議をもってイスラエ

ルの民を救い出すことによって、ご自分を現し、自己紹介してくださいました。あの出エジプトの際の十の奇跡も、いわば神の自己紹介です。ただ、そのような自己紹介では、多くの神々の中でも圧倒的に力強い神、どの神よりも大きな神と言う理解を持たせることは出来たかもしれませんが、絶対の神、他の神々と比較すること自体が間違っている、同じ次元で語ることが出来ない、超絶した神と言う理解に至らせることは出来ませんでした。

そのために用いられたのが、天地創造の物語によって、ご自分が誰であるかを教える方法です。この物語で神は、ご自分を「ある」と言う方としてではなく、もっとなじみやすいように、当時、まわりの民族が用いていた「エローヒム」と言う言葉を用いて、ご自分を紹介しておられます。「エローヒム」には「力」という意味があると言われていますが、「私はエローヒムだ」という自己紹介だけでは、何の紹介にもならず、周囲の宗教の神々と混同されるだけだったでしょう。またエローヒムは複数形だったために、多神教に陥る可能性も残ったことでしょう。ですから、とりあえずエローヒムと言う言葉を用いても、ただのエローヒムではなく、絶対のエローヒム、超絶したエローヒム、時間も空間も物質も超越したエローヒムであると、天地創造の物語をもって自己紹介してくださったのです。

神は当時の「神」と言う異教の言葉を用いてご自分を紹介しながら、周囲の神々とはまったく異なる、超越神、絶対神であることを教えてくださったのです。天地創造という人間の想像と理解をはるかに超えた神のみ業をもって、ご自分がどのような神なのかを説明してくださったわけです。天地創造の物語は、普通、どのようにして天地が創造されたかを記録したものと理解されていますが、そうではなく、むしろ、神はどのような方であるかの説明なのです。

当時の世界には、神と言われるものがたくさんありました。そのようなものの存在を、聖書は否定していません。中には不思議を行う神、力ある神も存在しました。それも聖書は認めています。ただ、天地創造の神は、唯一絶対の神であり、他の神々と呼ばれるものとは比べることすらできない、次元の異なる方であることが、天地創造の物語ではっきりと示されているのです。

聖書には、「他に神はいない」と言う表現がいくどか記されています。この場合、二つの意味が考えられます。一つは、結婚した女性が他に男はいないというときに似ています。たとえ世の中に男性はたくさんいたとしても、あなたにとっての男は一人だけであるという意味です。神々といわれる存在はたくさんあるが、イスラエルにとっての神は、アブラハム、イサク、ヤコブの神だけであるという主張です。もう一つは、世の中に、神と呼ばれる存在はたくさんあっても、絶対者、創造者、「ありてある者」と自己紹介ができる神は、お一人だけであるという意味です。クリスチャンたちがこの二つの意味を混同して語ると、

ややこしいことになってしまいます。

ちょっと角度を変えて考察してみましょう。モーセはエジプトの王宮で成人しましたが、幼いときはユダヤ人の実母の許で育てられ、ユダヤ人の歴史とユダヤ人の神、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブの神について学んだに違いありません。自分はイスラエル人であるという自覚と、ユダヤ人の神を礼拝しようと言う決意は強かったとも理解できます。とはいえ、その神知識は、今の私たちの知的理解に比べると、まさに幼稚なものだったと思われます。そのために、彼はミデアンの土地に逃れたとき、ミデアン人の宗教、つまり異教の祭司のところで世話になり、その娘を娶ってさえいるのです。

その彼が、燃える柴の中に現れてくださった神に会うという、新たな神体験を通してより深く神を知るようになったのです。さらに、イスラエル人をエジプトの圧制者の手から救い出す使命を遂行し、その使命のために与えられた力を行使する中で、モーセは神に対する信仰と忠誠を深めて行きました。とはいえ、あれほど大きなイスラエルの群集を導いて約束の地カナンに至るのは、たとえ、神からの奇跡的力と強い指導力をもっても不可能でした。モーセだけではなく、イスラエルの民衆全体が、「ありてある者」である神を信じ、「この神に従いぬく」という決心をしなければ、出エジプトは完遂できず、約束の地に到達することはできなかったのです。

そこで、何としてもイスラエル人たちを救い出そうとしておられる神、アブラハム、イサク、ヤコブの神とはどのようなお方なのか、他の神々とどこが違うのかを教えなければなりませんでした。十戒が与えられたとき、神は、「お前たちをエジプトの地、奴隷の家から連れ出した神である」と自己紹介をしておられますが、それだけでもまだ不充分でした。イスラエル人たちには、もっとしっかりとした神の理解を持たせなければならなかったのです。イスラエルの群集の一人ひとりが、自分たちの神は他のすべての神々とはまったく異なる神、決定的に違う神、異なる次元におられる方であるということを明々白々に悟るように、神は、ご自分こそ天と地を造った神であると、改めて自己紹介をしてくださったのです。

神は、当時のアニミズムの世界観の中で、多くの神々と不思議な力を信じて生きていた人々に対し、そのような世界観は間違っているとは言っておられません。多くの神々など存在しないともおっしゃっていません。神々に不思議を行う力はないともお教えになっていません。それらすべてを認めておられるのです。ただ、ご自分はそのような神々、あるいは力とはレベルの違うお方、次元の違うお方、天地の創造者であり絶対の存在者であることを教えてくださり、イスラエル人の信仰と忠誠をお求めになったのです。たとえ、同じ「神」という言葉で呼ばれたとしても、まったく異なった神であることを示してくださ

ったのです。

ここで翻って、日本の実情に目を向けてみましょう。日本人の信仰も、モーセの当時の中東やエジプトの人々と大差はありません。基本的にアニミズムで、多神教的感覚の中にいます。ただし、筆者がいくどもくり返して述べているように、日本人の宗教心は、多くの民族の宗教心よりも、一段と高いレベルにあるというか、それほど堕落してはいないというべきか、かなり異なっているのも事実です。日本人はアニミズムの感覚は持っていても、多神教的な宗教心に流されてしまうことはなく、むしろ汎神論に留まり、極めて一神論的感覚さえ持っているのです。

確かに通俗的な日本人の宗教心には、多くの神々が存在します。八百万の神々と言われるとおりです。ところがこれらの神々は、本来、天地創造の神とはまったく関係がない存在、次元の異なる存在なのです。いくども述べているように、日本語の「神」と言う言葉は、本来、単に「うえ」という意味です。人間より上の能力を持つと思われるものは、すべて「かみ」すなわち「上」であり、漢字を当てはめると「神」「上」「守」「頭」「髪」となります。「うちのカミさん」の「カミ」も同じです。

キリスト教が日本に入ってきたとき、聖書の神、天地の創造者を何と翻訳すべきかと言う問題が起こったことは良く知られています。大日様、天帝、上帝、天主、創造者、創造主などなど、いろいろな案があったようですが、結局、プロテスタント陣営では、日本の宗教心を表して馴染みやすい「神」が選ばれたのです。したがって私たちの日本の状態は、ちょうどモーセの時代に、神は天地創造の物語をもって自己紹介をしなければならなかったのと、よく似ているのです。

「神」といわれても、一般の日本人には「どの神だ？」と言うことになり、せいぜい道端に転がっている神々を思い起こすだけなのです。とはいえ、日本人はモーセの時代の人々とはずいぶん違います。通俗的な神概念では道端に転がっている神々を思い出したとしても、日本人の心の奥深くには、そのような神々とはまったく違う、気高く崇高なお方、目に見ることも口で表現することも出来ない、神と呼ぶことさえふさわしいかどうかと思われる存在者を感じる感覚が残っているのです。

日本人が、たとえわずかの時間でも、まじめな心持ちになって拝むとき、拝む対象の神は、「何々の神」と名前をもって呼ばれる神ではなく、そのような神々の背後におられる絶対に大きなお方を拝んでいるのです。それは単なる「神」、つまり「上」ではなく、絶対に高く、超越している存在者なのです。ただ、そのような方を、口で説明することは不可能であるし、愚かであるために、日本人はこの神についてとやかく言わないで大切にするの

です。そのお方のお名前さえないのです。これはイスラエル民族が、ヤーヴェという名を恐れ敬うあまり口に出すこともなく、とうとう発音を忘れてしまったという感覚に近いものです。西欧のキリスト教神学が、まな板の上の大根のように神を切り刻んで説明するような、畏れ多いことはしないのです。また、この神を手で触れ、目で見ることが出来る形にしようなどとも思わないのです。

ミケランジェロが描いた人間を創造している神は、筋骨たくましい初老の男性の姿をしています。日本人のひそかな本能的感覚からすると、心の奥深くで感じている気高い方を、このような衰え始めた人間の姿で描き出すなど、愚の骨頂なのです。たしかに日本にも、風神雷神のように絵で表現される神があります。あるいは、白いひげを生やして長い杖を持った、中国の仙人のような神の姿が描かれていることもあります。でも、ひとたび絵に描かれ、像で表現されたものは、もうあの気高く大きな方ではなくなっているのです。それは、一段も二段も低い神々、あるいは次元の異なる神々であり、単なる「うえ」の存在に過ぎないのです。

つまり、私たちクリスチャンの神は、「神」と言う言葉で呼ばれていますが、通俗的日本語の「神」とはまったく違う存在なのです。わたしたちの神は「神」ではないのです。むしろ、日本人がどう呼んだらよいのか分からないまま、心の奥深くで感じている方、誰であると言い切れないでいる方、言葉で説明も出来ず、絵画や像で表現することも出来ないために、誰にも言わずにそっとしているお方です。

九州の宗像市と対馬の中間に浮かぶ沖ノ島は、昔から気高い神がお住まいになる島として、宗像神社の聖地とされて来ましたが、人々はその神を「おいわずさま」とお呼びします。名前をつけてお呼びすること、口に出すことさえ畏れ多いということで、口では言わない神、「おいわずさま」と呼ばれるようになったのだそうです。

日本人ははっきりと説明できないまま、と言うより多分、自覚もしないまま、巷に転がっている神々と、自分が心の奥底で本能的に感じている、気高い存在者とは区別しているのです。多くの日本人が心の奥底で感じているのは、まさに「おいわずさま」とでも表現しなければならない貴く、尊く、気高く、大きなお方であって、道端に転がっている単なる「かみがみ」の神ではないのです。でも、その神を上手に言い表すことが出来ないのです。言い表そうとすると、たちまち、神々の一人になってしまうために、言い表さないのです。言い表さないために、ますますおぼろげになってしまうのです。

韓国語では、私たちの天地創造の神様を「ハナニム」と呼ぶのだそうです。「ニム」と言うのは日本でいう「神々」あるいは「様々な霊」に近いもので、「ハナ」には「第一」、「一

番」、「最初」などの意味があると教えてもらいました。日本では韓国語の「ハナ」に当たる言葉がないまま、「神」とだけ表現したために、私たちクリスチャンの神の意味がはっきり伝わらないといわれています。それが韓国の宣教と日本の宣教の違いの、一つの理由になっていると考える人も少なくありません。

確かに、日本語では「神」だけで「第一の神」とも、「一番の神」とも言いません。そのため、意味が不明瞭です。でも、日本人の宗教感覚には、第一でもなく一番でもなく、むしろ格が違う神、次元の違う神の感覚があるのです。それは、モーセを通して神が自己紹介したときの、イスラエルの民衆の神観念よりも優れたものでした。

ところが残念なことに、日本でのキリスト教は、西欧の神学に育てられた西欧宣教師や、西欧神学に「洗脳」された日本人牧師たちによって指導され、一方的に日本の神を偶像と決めつけ、日本人の神意識を低級なものとして嘲笑したのです。まじめに日本人の宗教や宗教意識を学ぶことなく、また、その日本の宗教が日本で果たしてきた社会的役割や心理的影響も考慮せず、ただ敵視して攻撃し続けたのです。

私たちは、アニミズムの世界観を否定する必要はありません。聖書の世界観はアニミズムです。私たちは日本の神々の存在を否定する必要もありません。日本語の神々は「上」と言う意味に過ぎません。聖書で言う悪魔もみ使も悪霊も、日本語ではみな神々なのです。人間より上の力を持つからです。ですから、私たちは日本のアニミズムの世界観を敵視する必要はないのです。そこには当然、聖書に啓示されたアニミズムの世界観とは「ずれ」があるでしょう。でもそれを敵視したり、低級な宗教観とみなして嘲笑したりする必要もないのです。

アニミズムの世界観を低級なものとしてあざ笑うのは、聖書を信じている者の態度ではありません。むしろそれは、進化論という非聖書的な世界観を宗教にまで適用したものであり、それを、私たち聖書的クリスチャンと自称するものが、恥ずかしげもなく主張していたのです。私たちは日本のアニミズムをあざ笑うのではなく、アニミズムを笑う科学信仰を笑うべきです。そしてむしろ、日本のアニミズムの世界観を橋渡しにして、福音を語るべきなのです。

さらに私たちは、日本人の神意識を非常に優れたものとして、認めるべきです。日本人が多神教の神々をばかばかしいものとして退け、神はいないとまで言いながら、それらの神々とはまったく異なった崇高な神意識を持っていることに注意すべきです。その意識は非常にかすかな、またおぼろげなもので、ともすれば淡く消え行きそうな感覚かもしれません。普段は誰も気づかずにいますが、まじめに人生を思い、世界を思うとき、また、善

悪を思い、無限を思うとき、浮かび上がってくる感覚です。豊かな自然に包まれ、豊富な収穫に恵まれ、人生の素晴らしさに震え、感謝の思いに満ちるとき、思わずありがとうございますと頭を下げたくなるとき、かすかに意識する存在者です。

　多くの日本人は、神道が多神教と分類されることに違和感を持っています。自分たちの宗教を多神教と説明するのに恥じています。だから、神はいないと言い、自分は無宗教だとさえ言います。でも、信仰心を尊いものとして認め、特殊な宗教を除いては、宗教の悪口さえ言いません。日本人は「日本人的神感覚」と言っても良いほどの、共通の感覚を持っているのです。それは極めて本能的な神意識です。そしてそれを大切にしているために、日本人の宗教心情を表現した神道の悪口をいう、キリスト教という西洋の宗教に違和感を持ち、あるときは敵意さえ抱くのです。

　私たちは日本人のこの神意識を大切にすべきです。神に似せて造られた霊的存在者として、日本人はまだかすかに絶対者である神、創造者である神の意識を持っているのです。日本人に福音を伝えたいと、心から願うのならば、私たちは、日本人の多くが心の奥底に感じている、本能的神意識に目覚めさせ、それを通して、天地創造の超絶神を語っていくべきなのです。使徒パウロがアテネの神殿で、ギリシヤ人の偶像礼拝の中に、わずかに、ほんのわずかに、真の宗教観、正しい神意識の断片を見出して、それを共通事項として持ち出し、それを通して真の神について語ろうとした態度を、大切に受け継ぐべきだと思うのです。